猫の骨過形成症

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題　　第19回獣医病理学研修会標本No.315

動物は猫，雑種，雄，約３才である。

本例は約2.5か月間の臨床経過をたどって自然死した。主症状は，右前肢と下顎の腫脹，右前肢あるいは全身性疼痛であった。Ｘ線検査では，左右上腕骨，尺骨，橈骨，右大腿骨，前頭骨,頭頂骨にび漫性外骨膜性肥厚(外骨膜炎？）を認めた。

肉眼的には，上記の骨のほかに，下顎骨，左右肩甲骨，寛骨，左大腿骨，右脛骨に，次の変化を所見した。それは，外骨膜の肥厚，骨化であり，肥厚部表面は粗糙で赤褐色を示した。肥厚の程度は部位により変化に富んでいたが，前頭骨，下顎骨，上腕骨，尺骨，右大腿骨において著明であった。また，病変部の表面から周囲組織はしばしば出血し，脆弱化していた。骨髄は赤色髄であって，髄腔内に異常骨形成は認めなかった。なお，体格はほぼ正常大であったが，全身性削瘦が著明であり，諸所の体表リンパ節は血液を吸収して中等度に腫大し，肺は広範囲に及んでうっ血性水腫を示した。

肉眼的に肥厚を示した骨の組織変化は，外骨膜性異常造骨であった（図１：大腿骨骨幹横断，ＨＥ染色，×15)。異常骨組織は，固有の骨組織（管状骨では皮質骨）の外側に添加性に形成され，両者の境界は明瞭であった。添加された異常骨組織は，極めて菲薄な薄層状から，管状骨皮質骨の２倍以上の厚さに及んで不整形，波状を呈する像までさまざまであった。異常骨組織は，管状骨では骨幹端から骨幹に主座し，関節には著変はなかった。

異常骨組織は部位により種々の成熟度合を示した。すなわち，ほぼ完熟した緻密骨，石灰は沈着するがいまだに未熟な骨組織，類骨（図２：上腕骨縦断，ＨＥ染色，×114;下縁に皮質骨，これより上方が異常骨組織），軟骨から構成されていた。異常骨組織内には，不整形，大小不同の管系統ならびに骨梁があり，管腔内および骨梁間には，骨芽細胞，線維性組織，形質細胞，リンパ球があり，まれには破骨細胞も認めた。

異常骨組織の表面から周囲組織にかけては，類骨を伴った骨芽細胞増殖，これに連続する新旧さまざまな肉芽組織の旺盛な増殖をしばしば認めた。

以上の骨病変は，骨過形成症，骨増殖症，外骨症のカテゴリーに入れられる。このカテゴリーに入る既知疾患として，肺性肥大性骨関節症（人，犬，猫），小児皮質骨過形成症（人，犬），汎骨炎（犬），ビタミンＣ欠乏性肥大性骨異常栄養症（犬),ビタミンＡ慢性中毒による外骨症（猫）が報告されている。

これらの疾患の所見と本例のそれとは，局所的には類似するが，全身観的には一致しない。また，本例の原因は不明である。したがって現時点では，本例の診断名として，広義に「骨過成症」としておくのが適当と考える。